幸せなホットココア

ミル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幸せなホットココア

【Ｎコード】
Ｎ００１５Ａ

【作者名】
ミル

【あらすじ】
コナンと哀は元の姿に戻れた。それから一ヶ月。志保は新一たちと同じ帝丹高校に転入する事となった。蘭はそのとき、新一に告白する。だが、新一は・・・。

告白編

江戸川コナンと灰原哀が元の姿に戻ってから一ヵ月。
彼は幼馴染みの蘭さんと一緒に学校へ登校する。
私は博士の家で前と変わらない生活を送っていた。

ある休日の昼…
新一は博士の家のソファーに座る。
「なぁ。灰原…じゃなくて宮野！お前１８だろ学校とか行かなぁ～の？」
「何で私が…」
「だってコナンの時と違って今度は一緒に居ることできないだろ」
「私はあなたが一緒に居なくて清々するけど…。」
「でもさ、博士の奴、転校届けだしちゃったみてぇ～だし」
「博士がだしちゃったならしょうがないわね。学校行くわ」
志保のその一言で明日から学校に行くことになった。

「ここが帝丹高等学校！一応2年ってことで出してあるらしいから…」
新一は志保に職員室の場所を教え自分の教室に行った。
”ザワザワザワ…”
「静かに。今日は転校生の紹介がある。」
ドアが開き志保が教室に入ってくる。
「宮野志保さんだ！みんな仲良くするんだぞ」
「初めまして！宮野志保よ！よろしく…」
「じゃあ、宮野の席は…」
志保は担任に席を教えられる前に自分から席に行った。
「私、ここでいいわ…」
そこは新一の隣の席だった。

え？
何で宮野の奴、俺の隣なんかに…。
しかもこのパターンってコナンの時と一緒じゃ…。
「どうしたの？工藤君。私がこの席で何か不満でもあるの？」
そして休み時間。
「宮野さんってどこから来たの？」
「アメリカ…とでも言っておこうかしら…」
「宮野さんってどこに住んでるの？」
「米花町２丁目２２番地…そこが今私が住んでいるところよ…」
次々と志保に質問してくる。
そこへ蘭もやってきた。
「宮野さんってどこかで会ったことない？」
「最近ここに越してきたばかりなんだから会ったことあるわけないでしょ…」
「そ、それもそうだね…」
「おぃ。宮野ちょっと…」
新一に呼ばれ廊下にでる。
「あいつああみえて結構鋭いから気をつけろよ。」
「灰原哀だったことがばれないようにしろって言うんでしょ」
「あ、あぁ」
「大丈夫！私あなたと違って表にだすタイプじゃないから…」

そして志保が来てから一ヵ月がたとうとしていたある日のこと。
新一は蘭、志保と一緒に登校している。
「ところで前から気になってたんだけど、宮野さんと新一って知り合いなの？」
突然の蘭の発言。
「えっと、それは…」
おぃおぃ。何だよ。
蘭の奴きついとこつきやがって…

そこへ園子がやってきた。
ラッキ～♪
園子もたまにはいいことやるじゃん。
「蘭～。今度デパートでバーゲンセールやるらしいよ」
「え！いついつ？」
蘭達が話しているそのすきに新一、志保は教室へ向かう。
今日の１時間目は志保の得意分野とする科学だ。
教科の先生が入ってくると生徒達は自分の席に着いていく。
「では今日は昨日の授業の説明をしたいと思います。」
先生が授業の説明をしていく。
「だから…。こんな風に…」
チョークを使い図形も描いている。
「先生…」
突然志保が手をあげた。
「何だ？宮野」
「これは、こんな風にしてもできるんじゃないかしら…」
チョークでさっきとは違う説明をする。
「凄いな！宮野。これは大学なみの説明だぞ」
別に…、そんな顔をして席に戻る。
「おぃ。宮野。お前本当はいくつなんだよ」
「１８よ！前にも言ったでしょ…」
「そういう意味じゃなくて…」
「まぁ、アメリカにいた頃は１６で大学を卒業してたけどね…」
じゅ、１６で大学卒業！
じゃあ、あんな問題スラスラ解けてもおかしくないよな。

下校時刻になった。
新一が志保と帰ろうと思っていたがそこには志保の姿はなかった。
何だ？宮野、もう帰ったのか？
そこに志保の机の中から１枚の紙切れが落ちてきた。

何だこれ？
新一はその紙切れをひろげてみる。

【宮野さんへ
放課後、体育館に来てください】

ま、まさか？！
新一は体育館に向かう。
体育館の扉を少し開けのぞく。
そこには志保と1人の男子がいた。

「僕、宮野さんのことが好きです」
「好きになろうと嫌いだろうと勝手にすればいいわ。」
「ほんと！」
「でも私はあなたのこと好きじゃないわ」
その瞬間新一は安心したかのように息を吐く。
「ちょっと、だけでいいからさ付き合ってよ」
「嫌いって今言ったでしょ」
「ちょっとだけでいいからさ」
その男子は無理遣り志保のコートを脱がす。
そして志保にキスを迫った。
「ねぇ。ちょっとでいいからさ」
志保は首を横にする。
男子生徒がキスをしようとしたその時！
「おぃ！何やってんだよ」
「く、工藤君！」
「何だよ。せっかく良いときだったのに…」
新一の頭の中のあるものがきれた。
「次にこんなことしたらただじゃすまねぇからな」
その言葉に驚き男子生徒は逃げていった。

「大丈夫か？」
「えぇ。なんとかね」
「よかった…」
「あ、ところで毛利さんは？」
「いけねぇ～。そこで待たせてるんだった」
新一は手をだし志保を起こす。

そして志保が来てから半年が経過した。
時はすでに１２月。
木は枯れ雪の降る季節だ。
志保はクリスマスプレゼントを考えていた。
もちろん新一も。

ある夜、新一は蘭に米花公園に呼ばれた。
「どうしたんだよ。蘭」
「新一、大事な話なの。ちゃんと聞いてね」
いつもの蘭とは違う真剣な表情をする。
その表情に新一は唾を飲み込むばかりだ。
「私、新一のことが好き！それは推理オタクで音痴だけどそんな新一が大好き」
だが、そこには志保も来ていた。
もちろんその会話はしっかり聞いていた。
もう聞きたくない。そう思った志保は走って涙を流しながら家へと帰る。

何で、涙がでるの？
それになんなのこの苦しみは。
毛利さんが工藤君に告白しただけじゃない。
それなのにどうして。
私が工藤君のことが好きだから？

”ピンポーン”
博士の家に誰か来た。
誰かしら？こんな夜に？
恐る恐るドアを開ける。
そこには新一の姿があった。
彼は凄く喜んでいる。
おそらく告白にＯＫしたのだろう。
「なんでここに来たのよ」
志保が突然怒りだす。
「どうしたんだよ急に」
「あなたには毛利さんがいるのにどうして…」
ソファーに座らせ志保を落ち着かせる。
「何があったか知らないけどこれ飲んで落ち着けよ」
手渡されたものはホットココアだった。
志保は一口飲む。
「おいしい…」
「だろ。これ新発売のココアなんだぜ。それより何があったんだ？」
「あなたには毛利さんが居るのにどうして私の所なんかに来たのよ」
「何だ。そんなことか。」
「……」
志保は黙り込んだまま喋らない。
「今日、蘭に告白されたんだ。」
やはりそうだった。
「でも、断った」
え？
「俺には他に好きな奴がいるってな」
そして新一から志保へプレゼントが渡された。
「開けていいの？」
包装紙を開けるとなかから小さな箱がでてきた。

その中にはなんと指輪が入っていた。
「これ…私に…。でもなんで…」
「一緒にいるうちに好きってわかったんだ。この俺じゃだめですか？」
志保の瞳からは大粒の涙が溢れた。
「ありがとう！工藤君…」
新一から志保の指に指輪を付ける。
「高校卒業したら結婚しような」
志保は”うん”と首でうなづく。

告白編（後書き）

作者より
志保が帝丹高に転校生としてやってくるお話です。
最後の新一君の告白が私的には気に入っています。
と、言うことは志保と新一は婚約者同士と言うことになりますね。

ライバル編

工藤新一と宮野志保が付き合い始めて1年が経った。
3年生になりもうすぐ卒業という季節だ。
毛利さんとは3年のクラス替えでクラスが別れてしまいそれ以来あまり会っていない。
工藤君と私は同じクラスになり仲良くやっている。

「でさ…。ハハハハ」
工藤君は他の男子と楽しそうに会話している。
私も友達ができて話していると凄く楽しい。
組織にいた頃は友達なんていなかったからこんな楽しいものだとは全然知らなかった。
それに前にいたアメリカの学校と違って日本の学校の生徒は何か幼いけど皆凄く明るくてすぐに馴染める。
でも、私が1番楽しいことは工藤君と一緒にいること。
そうしてるだけでもとても幸せな気分。
「野…。宮野…」
「え?」
「どうしたんだよ。もう授業始まるぞ」
窓を眺めてた志保に声を掛ける。
「え、もうそんな時間。休み時間って短いものね…」
”ガラガラ”
担任が教室に入ってきた。
「今日は転校生の紹介がある」
”ザワザワザワ”
生徒達が騒ぎだす。
そして転校生が教室に入ってきた。

「初めまして！高橋夏美です。よろしくお願いします。」
「じゃあ高橋の席は工藤の隣だ」
担任は夏美の席を指差しながら言う。
転校生が席に着いた。
休み時間になった。
新一は隣の席の転校生に声を掛けられた。
「な、名前なんて言うの？」
「え？俺？工藤新一だけど…」
「え！あの名探偵の？」
「そ、そうだけど…」
「わぁ～。嬉しい～。私大ファンなの」
「へぇ～…」
何なのあの子。
転校早々工藤君と話したりして。
いくら隣の席だからって…。
もしかして私あの子に嫉妬してるの？
そして下校時刻になった。
「工藤君！一緒に…」
そこへ転校生がやってきた。
「工藤君♪一緒に帰りましょ」
新一の腕をひっぱりながら下駄箱に向かう。
何よ何よ。
まるで私をいじめてるみたいじゃない。
志保はしかたなく1人で帰ることにした。

一方新一達は…
はぁ。
なんなんだよ。
宮野と帰ろうと思ったのに…。
どうやら新一は志保と帰りたかったようだ。

「工藤君は小説とか読むの？」
「読むけど…」
「私ね工藤優作の小説大好きなの」
その言葉に新一の顔に笑顔が戻った。
「俺もその小説好きだぜ」
「え！そうなの！」
「お気にいりは闇の男爵かな」
「あ、それ私も大好き」
新一のクラスには小説を読む奴が1人も居なかった。
だから新一にとって同じ趣味をもつ人間がいてとても嬉しかったのだ。
「あと他には何？」
「他に親父の小説で好きなのは…」
「もしかして工藤優作って工藤君のお父さん？」
「そうだけど…」
「感激～♪名探偵に名小説家」
「ま、親父とお袋は今ロスに行ってて居ないけどな…」
そしていつの間にやら工藤邸に着いた。
「俺ここだから…」
そう言い新一は家の中に入っていった。
家に入るなり携帯を持ち出し博士の家の前に行った。
そして志保に電話を掛ける。
RRRRRRRR…
志保の携帯が鳴る。
「はい。もしもし…」
「あ、俺」
「どうしたの？工藤君」
「どうしたのってそれはちょっと心配だったから…」
「あら、心配してくれたの？それはどうも…」
志保は少しばかり機嫌が悪かった。

「おぃ。何すねてるんだよ」
「別に…。すねてなんかないわよ」
”プープープープー”
「ちっ！何だよこんなときに電池切れになりやがって」
新一は携帯に文句を言いながら家に帰る。
そして日はどんどん進み、いよいよ明日が卒業式となった。
「明日だね！卒業式」
「あ～。なんか緊張してきちゃった」
「宮野さんはどう？」
「別に私は緊張してないわ…」
相変わらずクールな口調で話す。
そして卒業式当日。
生徒達は体育館に向かう。
体育館には保護者や親戚でいっぱいだった。
そこには博士も来ていた。
体育館は静まり、校長の話が始まる。
話が終わり卒業証書が生徒達に渡される。
卒業式は無事終了し生徒達が保護者の席の横を通りながら退場する。
そこには拍手をする保護者達の姿が。
もちろん博士も拍手している。
1番後には黒子をかぶった2人の不思議な人まで来ていた。
何だ？あれ？
変装か？
不思議に思いながら退場していく。
教室に戻ると夏美から新一に手紙が渡された。
そこには体育館裏に来るように書いてあった。
新一は嫌々体育館裏に行く。
「何だよ。話って」
「私、工藤君のことが大好きです！」
突然の夏美の告白。

「ごめん…。俺、付き合ってる奴がいるから…」
そう一言言い残すと新一は志保の元へ行った。
「ごめんごめん。待たせた？」
「ええ。レディーに１０分も待たせるとはどういう神経しているのかしら…」
２人は手をつなぎながら帰って行く。

体育館裏の近くにはさっきの黒子がいた。
「あの子も罪におけない子よね」
「そうだな」
「フフ」
「何がおかしいんだ？」
「成長したわよね。あの子」

家に付き部屋へ向かう新一。
もちろん志保も一緒だ。
「そういえばここに来るの初めてだよな」
「えぇ」
そして新一が突然言った。
「隠れても無駄だぜ」
「え？どうしたの工藤君」
「居るのはわかってるんだよ」
そしてそこには新一の親達が出てきた。
「なんだ。わかってたの」
「あの黒子。母さん達だろ」
「さすが新一だな」
志保にはこの情況がなかなか飲み込めない。
「せっかくの卒業式だから来てみたのよ。そしたら…フフフ」
「（／／／／／）」
突然新一の顔が赤くなる。

「それより、その子誰なんだ？」
優作が志保のことを聞く。
「え～と…その…と、友達だよ。」
だが、新一の顔で優作はすぐわかってしまった。
「恋人だろ？」
「まぁ！新ちゃんいつの間に恋人なんかできたの？」
そして志保が聞いてきた。
「この人達は？」
「あ、紹介が遅れてすまなかったね。私は工藤優作。新一の父親だ」
「私は工藤有紀子。新ちゃんの母親よ♪」
志保はそれを聞き自分もあいさつする。
「私は宮野志保！元灰原哀ってところかしら…」
「あら！あの博士のところの…」
その後、志保は博士の家に帰っていった。
「母さん達は行かないのかよ」
「何よ！せっかく帰ってきたのに」
「実は当分こっちに居ようと思ってるんだ。」
と、当分だと？！
何でこうなるんだよ。
新一はまた優作、有紀子と過ごす日々が戻ってきた。

ライバル編（後書き）

作者より
志保にライバル出現です。
でも新一は志保を選び無事幸せな日が戻りました！
優作と有紀子はゲストとして入れてみました。

プロポーズ編

工藤君の家には今家族がいる。
前までロスに行ってたらしく中3以来家族とのんびり過ごしたときはない。
江戸川君だった時に何度か会ったらしいがそれは少しの間で何日も一緒だったわけでもない。
だから私は家族団欒を邪魔しないように工藤君の家に行くのをやめた。
私は工藤君の家に行きたい。
でもせっかくの団欒を邪魔するわけにはいかない。

「で、一体いつまで日本にいるんだよ」

「さあ。居ようと思えば一生いれるんじゃないかしらね」

「い、一生!?」

「あら?居ちゃいけないの?」

「そ、そんなことはないけどよ…」

「それよりあの子はどうしたんだ?」

「あの子って宮野のこと?」

そう言えば宮野の奴最近うちにこないよな。
ろくに会おうとしないし…。
まさか嫌われた?

んなわけないよな…ハハハハ…
はぁ。
新一は志保に会えずガッカリした様子だ。
「そうだ！新ちゃんもうすぐ誕生日でしょ。誕生パーティーしましょうよ」
「誕生パーティー！？俺はもうガキじゃねーぞ」
「まぁまぁ。あの、志保ちゃんって子も呼んでさぁ。ね」
志保が来るなら…
そう思い新一はパーティーをＯＫした。
そして有紀子が博士の家に電話を掛ける。
「もしもし♪」
「おぉ、有紀子さんか。何の用じゃ」
「志保ちゃんに用があるんで変わってもらえます？」
受話器に志保が出た。
「あ！志保ちゃん！５／４開いてる？」
「開いてますけど…」
「よかった！その日ね、新ちゃんの誕生パーティーやるの。よかったら来てね。じゃバイバイ～」

電話は一方的に切れてしまった。
そう言えば５／４は工藤君の誕生日…
せっかくだし行こうかしら…
志保はプレゼントを買う為ある店に向かった。
そこはデパートだった。
食料品売場に行くと必要なものを買い家に帰る。

そして１週間後、新一の誕生日の日になった。
志保は朝起きるなりなにやら食べ物を作り始めた。

そしてお昼。
言われた時間に工藤邸に向かう。
家に入ると、有紀子と優作がいた。

「あ、きたきた。」

楽しみにしていたかのように有紀子は志保に近付く。

「よかった～。来てくれたのね。」

まるで何か裏がある。
そんな感じだった。
そして主役の新一が来た。

「ったくガキでもないのになんでこんなことするんだよ」

そんな言葉を言ってると新一の前にプレゼントが渡された。

「ほら。新一、この小説お前欲しがってただろ」
優作がある小説を渡す。
「新ちゃん！私からはこれよ」
手渡されたものは写真立てだった。
そして耳元で、
「大切な人の写真とその子供の写真でもいれるのよ」
「（／／／）」
新一の顔が真っ赤になる。
そして志保もプレゼントをあげる。
「これお前が作ったの？」
それはレモンパイだった。
以前新一にこれをあげたところとてもおいしそうに食べていたのだ。
”モグモグ…”
「これ超旨い！」
パーティーは楽しく終了した。
そして突然電気が消える。
消えるのを確認すると新一は志保の唇にキスをした。
そのキスはちょっと甘酸っぱい味がした。
そして電気がついた。
”パチパチパチ”

え？

「おめでとう！」

何があったのか情況が飲み込めない

「ごめんな志保。突然で驚いただろ。」

今、工藤君私のこと志保って呼んでくれた。
そして新一は志保をつれ公園へと行った。

「これ母さん達が考えたんだ。もし本当に好きならキスしろって言うから…」

好きだったらキス…。
って言うことは工藤君は…
そして新一は志保の手を握る。

「俺、お前のことが好きなんだ志保！」

「ありがとう！私も工藤君のことが好きよ…」

「7月にでも結婚しよう！」

「えぇ…」

”パーンパーン”

突然クラッカーの音が鳴り響いた。

「新ちゃん！志保ちゃん！おめでとう！」

「か、母さん！いつから居たんだよ」

「そうね…新ちゃんが『お前のことが好きなんだ』って言うところかしら」

「（／／／）」

「でもよかったわ♪結婚が決まって」

何で俺の親はいつもこうなんだよ。

「あ、そうなったら早く式場とか日にち決めなくちゃね」

そして有紀子はルンルン顔で家に帰って行った。

プロポーズ編（後書き）

作者より
新一の誕生日に志保に告白です。
で、有紀子の性格から新一と志保の会話の立ち聞きをさせてみました。

結婚式編

7月…
それは私達が結ばれる月。
工藤君は1日が良いと言ってたが私は7日が良い。
だってそれは年に1度の織姫と彦星が出会う日だから。

「なぁ。志保！」

「何よ…」

「もう結婚するんだしさ俺のこと工藤君って呼ぶの止めない？」

「私は呼びやすくて気に入っているけど…」

「でもさ…」

「わかったわ…。新一君って呼べばいいんでしょ…」

志保は了解するなり1枚の紙を渡した。

「これに呼ぶ人の名前書いておきましょ…」

「そうだな…。まずは、蘭…次は…」

次々と名前を書いていく。

「あの子達はどうする？」

「あの子達って元太達か？」

そう言えばあいつらもう小3何だよな。
どうするかな…
新一も悩むのも当然だった。
まさか新一がコナンだったことを話すわけにはいけなかったから…

「どうするの？」

志保がもう1度尋ねる。
そしてふと思いついた！
知り合いとして呼べばいいんだと…

「あいつらも呼ぶか！」

「そうね…私も呼びたいと思ってたの…」

紙には現在、
毛利蘭、小島元太、吉田歩美、円谷光彦、服部平次、遠山和葉、鈴木園子、
高校時代のクラスメイトやその他新一の親戚などの名が書かれている。

そして7月6日…
この日はウエディングドレスのサイズ合わせの為志保は式場に行った。

志保が出掛けてから1時間後、ある来客者がきた。
来るなり突然「久しぶり」そう言ったのだ。

「あの～。どなたでしたっけ？」

「もう忘れたの？私よ。高橋夏美」

「あぁ、たしか転校生できた…。で、何のよう？」

「結婚…するんだってね。おめでとう…」

彼女は少し悲しそうな顔で言った。

「あ、ありがとう」

夏美はそれだけ言うと来た道を帰っていった。

それから1時間後志保が戻ってきた。
そしていよいよ結婚式当日を迎えた。
新一は朝早く式場に向かう。

そして午前１０時、式が始まった。
新郎新婦が入場する。

「わぁ。綺麗～」

「本当ですね」

そこには少年探偵団の姿もあった。
舞台には平次が登場する。
スピーチを頼まれたのだ。
「結婚おめでとうございます。今日はとてもええ天気で結婚を祝っとるようです。
え～と…工藤とはええライバルやけど結婚してもライバルと言うことを忘れるんやないぞ。
そやから…えーと…」
平次は棒読み状態だ。
しかもポケットから紙切れを取り出している。
「その…末長くお幸せに…」
やっとスピーチも終わった。
式は無事進み、最後のブーケ投げに突入した。
志保が力一杯になげる。
そして1人の人がキャッチした。
それは歩美だった。
「やった～♪」
その後志保と新一は車に乗り込み家に帰る。
「今日からお前は工藤志保…。間違えるなよ」
「間違えるわけないでしょ…」

その日は帰りが遅かったということもあり、今夜はインスタントで我慢することになった。
何だよ。俺は志保の手料理が食いたかったのに…。

「あ、それよりどこいく？」

「どこ行くって？何処に？」

「決まってるだろ、新婚旅行だよ」

「ハワイ…」

「ハワイ？お前そこに行きたいのか？」

志保は軽く頷く。

そして有紀子がやってきた。

「結婚おめでとう♪志保ちゃんがハワイが良いっていうんだから
つれてってあげなさいよ」

新一は別に嫌ではなかった。

お金もあるし休みもある。

新一と志保の意見が重なり新婚旅行はハワイに決定したのであった。

つづく

結婚式編（後書き）

作者より

わぁう～。なんかどんどん話が凄いことになってる…

次は、新婚旅行でしょうかね…。

新婚旅行編

夏の陽射しが容赦なく照りつける太陽。
サラサラとした砂浜。
そしてこの波の音。
私と新一君は新婚旅行にハワイへやってきた。
今はハワイの新一君の別荘にいる。

「なぁ、外行かないか？」

「あら？こんな暑いのによく行くきになるわね…。私はここに居た方がいいわ…」

「そ、それもそうだな…。ハハハ…」

昨日の夜の飛行機でハワイに到着、着いてから1度も外に出ていない。

今の気温は３６度。
真夏日とも言ってもよい。
まぁ、こんなに暑いのでは出る気にならないだろう。
新一は志保の腕を引き外に出る。

「ちょっと、何するのよ」

そしてそのままある場所へ到着した。
そこにはフェリーが一船、二船と止まっている。

「ここは…」

「フェリー場。風が来て気持ちんだぜ」
新一と志保はフェリーに乗り込む。
”ブロロロロ…”
エンジンがかかりフェリーは動きだす。
運転するのはもちろん新一だ。
「貴方、フェリーの運転なんか出来たの？」
「前にハワイに来たとき親父に習ったんだ。」
肌には冷たいような、生温いような風が当たる。
とても気持ちが良い。
「気持ち良い…」
「だろ？」
フェリーは簡単に一周し乗り場に戻る。
そして次に向かった先は射的場。
”パンパン…”
いろんな客の射的の音が聞こえる。
「銃打つなんてあの時以来ね…」（コミックス１８巻参照）

そう、私が新一君こと江戸川君と出会ったあの日以来…。

「……保…志保…」

「え？」

「何だよ、ボーッとしちゃって…。お前らしくねーじゃねーか」

「あら？私だって考え事くらいするわよ…」

「そんなことよりさ、海…行かねーか？近くにあるんだ」

「そうね…。せっかくだし行くのもいいわね…」

～海～

新一はサングラスを掛けチェアーに座りながらトロピカルジュースを飲む。

志保も新一同様、チェアーに座る。

わぁ、眩しい…

ここは太陽がギラギラと照りつける海。

だが、志保はサングラスをしていなかった。

「え？」

志保の目にサングラスがかけられる。

「眩しいだろ？それに結構似合ってるぜ…」

まるでわかっていたような顔をして言う。

さすが、名探偵の工藤新一君…。

何でもお見通しってことね…。

ふと気が付くと志保の瞳には涙があった。

「どうしたんだ？どこか痛いのか？」

「何でもないわ…。ただ目にゴミが入っただけよ…」

実際は違う。

私の涙の理由、それは嬉しかったから。

今までこんな楽しいことがあっただろうか。

組織にいたころは海なんて来たことなかった。

まして、留学でアメリカはあるがハワイ何かには来たことない。

旅行ってこんなに楽しいものなのね…。

本当に楽しい理由は彼が居るからかもしれない…。

私達は別荘に戻る。

彼はホームズの小説を読み、私は夕食の用意をする。

博士のご飯を作ってたから料理には慣れてるけど新一君に食べてもらうのは今日が初めて。

”トントントン”

包丁の音がリズムかるに響く。

今日のメニューはカレーライスだ。

２０分くらいするとカレー独特の良い匂いが部屋中に広がる。

「旨そうー」

新一はパクパクと食べ始める。

「旨めー！お前、こんなに料理上手かったのか？」

「博士のご飯をいつも作ってて慣れてるだけよ…」

そして「おかわり」と言う声が響く。

志保は「はいはい。」と言いながらキッキンへ行きご飯を盛りカレーをかける。

テーブルに置くと新一はまるで無邪気な子供のように美味しそうに食べ始める。

貴方って本当にいつまで経っても子供みたい。

そう、無邪気で好奇心旺盛の子供。

推理する時は真剣で冷静な顔をしているのに普段は子供のように燥いでいる。

貴方はもう１９歳の夫なんだからもうちょっとしっかりしなさいよ…。

新婚旅行編（後書き）

作者より
私の予想で志保さんはいつも博士のご飯を作ってると思います。
博士って料理苦手だし、他に出来る人は志保さんしかいないし…
でも、次はどんな話にしよう…

志保の気持ち編

私と新一君が結婚して早6ヵ月。
この家の生活にも大夫慣れてきた。
優作さんと有紀子さんは気を使ってるのか再びロスへと行った。
だから、今は私と新一君の2人で暮らしている。

”ｐｉｒｒｒｒｒｒ…”
新一の携帯電話が鳴る。
私はこの電話がかかってくると不安でしょうがない。
事件、事件で彼が行ってしまう事があるから…。
”ピッ”

「はい。工藤です。はい、ええわかりましたすぐ行きます…」

新一は携帯を切る。

「目暮警部からだった。事件があったからすぐ来てくれだって…」

彼は今でも名の知れた名探偵として活躍している。

「あらそう。行ってきなさいよ…」

何言ってるの私…。
本当は、本当は…。

「すぐ戻る。」、彼はそう言い残して行ってしまった。

「お願い行かないで」、私はそう言いたかった。

でも、そしたら彼に迷惑を掛けてしまう。
彼の邪魔をするようなことはしたくない。
だからいつも私は笑顔で見送る。
食器を洗い、洗濯機を回し、洗濯を干す。
いつもいつもこれの繰り返し。
別に私は嫌でもない。

午後、私は夕食の買い出しに行く。
スーパーに付き、今日の夕食を考えながら食材を買う。
買い物を終え外に出ると、雨が降ってた。
今日の天気予報は1日中晴れって言ってたのに…。
丁度、近くにコンビニがあったのでそこでビニール傘を手に入れる。

自宅に着く頃には雨は先程よりひどくなっていた。
新一は大丈夫だろうか…。
そんな心配をしつつ志保は新一の帰りを今か今かと待つ。
1時間、2時間と時間が過ぎていき、今は午後10時。
いくら何でも帰りが遅い。
朝出掛けたと言うのに…。
そして時間は午後11時。
どうしたというのだろうか。
まさか、新一の身に何かあったのでは！
そんな考えもしてしまう。

”ピカーゴロゴロ…”
雷が鳴り始める。
別に恐いというわけでもない。
だけど…、だけど…
もし、新一が雷に打たれでもしたら…

そんな心配もしてしまう。

「新一……君…」

一体、今どこにいるのだろう？
今、何をしているのだろう？
お願い早く帰ってきて…

気が付けば志保は米花駅の前にいた。
この雨の中傘もささずに新一の傘だけを持ちやってきた。
あまりにも心配で我慢しきれなかったのだ。

「志保！！」

突然誰かに名前を呼ばれた。
振り向くとそこには新一の姿が…

「びしょ濡れじゃねーか！どーしたんだよ…」

「心配だった…（ボソッ…）」

志保の声は雨の音に消され新一の耳には届かなかった。

「え？何？」

「何でもないわ…。貴方が傘を持って行かなかったから迎えに来ただけよ…」

「でも何でお前、傘さして来なかったんだよ…」

「忘れただけよ…」

普通こんな大雨の日に傘を忘れるであろうか？
忘れるとしたらそれは1秒でも早く傘を届けるべく自分は傘を持ってこなかった。
そんな考えがつく。

「早く俺に傘届けたかったんだろ？大雨の日に傘ささないって言ったらそれくらいしか
ないし…」

「まぁ、そういうところね…」

新一君、貴方の推理には大きな穴があるわ…
本当はいち早く新一君に会いたかったから無我夢中で傘をさすのを忘れてしまった。
新一は志保の持ってきた傘を開く。
新一は志保の手を引き一緒の傘に入る。
そして自宅に向け歩き始める。

「……」

だが、何も会話もなく静かなままだ。
町行く人達はどこからどうみても喧嘩中のカップルに見えるだろう。

「なぁ。何か会話しようぜ。俺達夫婦なんだしさ…」

新一の言葉も虚しく何も会話のないまま自宅に着いた。

家に着いても志保は何も話さない。

そのことが気になり志保の顔をのぞく。
すると、志保の瞳には涙がたまっていた。
「おぃ、どうしたんだよ。俺なんか傷つくようなこと言ったか？それとも何処か痛いのか？」
「……」
志保は何も言わない。
「俺が居ない間に何かあったのか？」
志保の涙は今にも溢れそうだ。
「どうしたって言うんだよ！」
涙は先程より増えていた。。
新一は怒った口調で言ってしまったので志保に誤る。
「ごめん…。怒った口調で言ったりして…。」
貴方の口調に泣いているのではない。
私は…私は…
考えるとどんどん涙が溢れる。
「……た…」
「え？」
「…貴方が居なくて淋しかった…」

私が彼に始めて言った本音。
いつもは彼に迷惑を掛けないように、また心配掛けないように心の奥にしまっていた。
だが、ついに心から溢れる気持ちを言った。
すると彼は私を抱き締めた。

「ごめん…。お前がそんな思いをしてたなんて知らなかった…。馬鹿だよな俺…。妻を
1人残して事件に行っちゃうなんてさ…。夫失格だよな…」

何言ってるのよ…
貴方は夫失格じゃない。
私が妻失格なのよ…
妻はどんなことでも頑張って乗り切らなければいけない…
それなのに私…

彼は1日中私を抱き締めてくれた。
そして朝、新一の携帯が鳴る。
だが、新一は画面を確認するなり切ってしまった。

「今日の仕事は臨時休業だ。」

「え？だって貴方は事件現場に行きたいんでしょ。なのにどうして…」

「1日くらい大丈夫さ。それに俺も今日は志保と居たい…」

その言葉は私の心に強く響いた。
嬉しくて、嬉しくて…

志保の気持ち編（後書き）

作者より
新一がなぜ帰りが遅くなったかと言うのは、
事件を解いたが帰る途中にまた事件に遭遇してしまいおまけに大雨で電車が大幅に遅れ
たので帰りが遅くなったと言うわけです。
事件を解いた帰りにまた事件に遭遇するのは何とも新一らしい…
最後の方、かなりラブラブです。

子供編

工藤家での2人の生活。
でも、今は3人での生活だ。
私と新一君、それから私達の子供の一保（かずほ）。7歳の女の子だ。
「新一君、今日私、出掛ける用事があるからその子頼むわね…」
「た、頼むってな…。一体どこに行くんだよ」
「博士の知り合いがおもしろいものを作ったんですって。だからこれから博士と行くのよ…」
「なら、一保もつれていけばいいだろ？」
「それは子供に敏感に反応するらしいの…。だから頼んだわよ…」
そう言い残し志保は行ってしまった。

一保をソファーに座らせ新一はソファーに座りながら推理小説を読む。
それを一保が興味津々に見つめる。
「一保も読みたいのか？」
新一は一保を膝に乗せ小説を見せる。
「これ、本？」
「あぁ。小説って言うんだ。コナン・ドイルが生み出したシャーロック・ホームズの小説だぜ」
「シャー…？」
「シャーロック・ホームズ。いろんな難事件を解決する名探偵さ…」
新一はまだ小さい一保にホームズのいろんな話を話す。
ホームズのことを1度話しだすと止まらないのだ。
気が付けば時計は12時を回っていた。
「そこで、ホームズは……」
「お父さん、一保お腹ペコペコ…」

「あ、わりー、もうこんな時間か…。どっか食に行くか…。」
２人は米花駅前にあるＣＯＷバーガーに行くことにした。
”ガヤガヤガヤ…”
店内は昼時ということもあり混んでいる。
「混んでるな…。」
「一保、ハンバーガー！」
新一達の順番が廻ってき、注文する。
「フレッシュバーガセット１つとハンバーガーセット１つ…」
「はい。８４０円になります…。」

メニューを受け取り空いている席を探す。
「お、あそこ空いてる」
運よく空席をみつけそこに座る。
そして新一はフレッシュバーガーセット、一保はハンバーガーセットを食べ始める。
丁度、新一の隣には女子高生が座っていた。
新一の母校、帝丹高の制服だ。
「一保、旨いか？」
「うん。おいしい」

昼食が済み、店をでる。
そこへ先程隣に座っていた女子高生が追い掛けてきた。
「あのーー」
その声に気付き新一は振り向く。
「え？」
「この、ペン…」

渡されたペンは新一がいつも持ち歩いているペンだった。
おそらく店内で落としたのだろう。
新一はすぐ自分のだと確信した。
それはペンに、S．KUDOUと書かれていたから。
「ありがとう…」
だが、その女子高生は新一をじっと見つめている。
「何？」
「新一お兄さん？」
「え？」
「やっぱりそうだ。私、吉田歩美。８年前に結婚式に参加した…」
「あ、歩美ちゃん？！」
結婚式に参加した当時はまだ小学3年生だった。
今はもう高校2年生というから、驚きだ。
「覚えててくれたんだ。それよりその子誰？」

子供が生まれたことは、ほとんどの人間には報せたが歩美達には報せてなかった。
「あぁ、俺の子供…。」
「ええ！新一お兄さん子供いたの？！」
一保も新一に聞く。
「この人だあれ？」
「う～ん、俺の知り合いってところかな。」
歩美があいさつする。
「私、吉田歩美。あなたは？」
「一保…。工藤一保…」
「一保ちゃんか…。なんか可愛い♪」
家に戻るとまだ志保は帰ってなかった。
「おっせーな、志保のやつ何してんだ？」

「ねぇねぇ、お父さんはお母さんと何で結婚したの？」
突然言われた新一への質問。
「な！んなもん子供には関係ないだろ（／／／／）」
「お父さんお顔真っ赤かだよ」
「…好きだから結婚したに決まってるだろ…」
「どこが好きなの？」
「あーもーうるせー！あいつの笑顔だよ！あんま笑わないけど笑うと結構可愛いんだぜ
」
「あら、あまり笑わなくて悪いわね…」
その声に気付き新一は振り替える。
そこには志保の姿があった。
「か、帰ってきてたのか…」
一保は新一にした質問と同じ質問を志保にする。
「そうね…。無邪気で好奇心旺盛で子供っぽいところかしら…」
そう。無邪気で好奇心旺盛で子供っぽいところは今も全然変わらない。
２７歳で小学１年生の子供が居ると言うのに…。
彼のこの性格は一生治りそうにないわね…。

でも、一つ忠告しておくわ。
あまり事件に首を突っ込みすぎてあの世の人間になっちゃったってことがないようにね…。

それだけは気をつけて頂戴。
「…さん…お母さん、どうしたの？さっきからずっと呼んでるのに…」
「あら、ごめんなさい。ちょっと考え事してたから…」
「考え事？どうせ俺が事件に首を突っ込みすぎて死んじゃったらどうしよう…。なんて

考えてたんだろ？いくら俺が好奇心旺盛だからってそこまで首は突っ込まないぜ」
さすが名探偵。
考えていることもお見通しだ。
新一は志保にキスをする。
「それに、お前等おいて天国行くわけにはいかねーだろ」
一保が新一に近付く。
「今、お母さんとお父さんキスしてたぁー！明日友達に報せようっと…」
「お、おぃ、そんなこと友達に言わなくていいんだよ（／／／／）」
「あら、いいじゃない。私達の愛を証明できて…」
「志保まで…」
クラス中の話題になったらどうなるかしらね。
きっともしその友達が来たらキスしてとか言われる…
そしたら堂々と皆の前で新一君と…

つづく

子供編（後書き）

作者より
新一君と志保ちゃんの子供、一保ちゃん登場です。
新一の一に志保の保を組合せて考えました。
性格は新一君似。（興味津々、好奇心旺盛なところとかそっくり）
顔は志保ちゃん似ですかね…。（今の一保顔は哀ちゃんそっくりです。）
ゲストとして歩美ちゃんを登場させてみました。
最後の方めちゃくちゃです。
自分でもわけわかんないし…
でも、新一君、恋愛とかの心は読み取れなくてもそれ以外の考え事はお見通しってことです。

同窓会編

朝、ポストを開けると優作宛の沢山のファンレターが届いていた。
もちろん新一宛のファンレターも沢山交じっている。
これはいつものことなので特に驚くことではなかった。
新一はそれを家の中から持ってきた空き箱に入れ家の中に運ぶ。
そして手紙を分け始める。
「えーと、工藤優作様、工藤優作様、工藤新一様、工藤優作様…」
30分かかりやっと分けるのを終える。
すると1枚のはがきが”ひらり”と落ちた。
どうやら見落としたらしい。
「ん？何だこれ？」
そこには、黒いペンで、工藤新一・志保様と書かれていた。
これはファンレターではないと確信した新一は文章を読み始める。

【工藤新一・志保様へ】
工藤新一・志保様お元気でしょうか？
今度、高校の同窓会を開くのでなるべくご参加下さい。

日時　5月4日
場所　帝丹高校

「同窓会のお知らせ…か…。何か面倒くさいな…」
「ねぇねぇお父さん、同窓会って昔のクラスの友達が集まって楽しむんでしょ。私も行きたい！」
「行きたいってあのな…。それに行ってもおもしろくねーぞ。お前の知らない人ばかり

だし…」
「いいの。それでも行く！だってお父さんの昔のこといろいろ聞きたいもん」
「ハハハ…。志保はどうするんだ？」
「そうね。その日は特に用はないし、参加しようかしら…」
丁度、往復はがきだったので参加にマルをつける。

そして同窓会当日…
「…さん…うさん…起きて…、お父さんってば…」
自分の耳元で子供が呼ぶ声が聞こえる。
「んーだよ、今日は休みだろ。」
「今日は同窓会の日だよ。」
同窓会…、そういえば昨日はあの小説の発売日だったから5月3日。
と、いうことは今日は…
「今、何時？」
「えーと、8時35分…」
8時35分…、確か同窓会は10時…
んーだよ、まだ時間あるじゃねーか。
もう少し寝よう…。
再び新一は眠りにつく。
「あ、お父さん、寝ちゃ駄目、今日は同窓会の日だよ」
「あと、30分だけ…」
「今、TVで新しい推理小説の紹介してたよ」
え！まじ！
新一はベットから飛び起き、TVの前のソファーに座る。
そこには、自分の父である優作が書いた新しい小説の紹介をしていた。
『今回のテーマを…』
『そうですね…。太陽のようなお方とでも言っておきましょう…』

ＴＶに出ている優作はマスコミ関係者に囲まれている。
だが、太陽のようなお方の意味がマスコミ関係の人達には全く意味がわからない。
『それはどんな方なのですか？』
『読んでからのお楽しみです。』
『ＴＶに向かって一言お願いします。』
『このＴＶを観ているそこの青年には解けるはずだ』
おぃおぃ、それってもしかして俺のこと？
まてよ、太陽のようなお方ってどっかで…
あ！！まさか！！
新一は急いで阿笠博士の家に行く。
もちろん一保もついていく。
「新一、どうしたんじゃ？」
「どうしたんじゃねーよ。もしかしてあの小説って…」
「おぉ、この間、優作君がうちに来てのぉ、新一がお世話になってるお礼がしたいって
いうもんじゃから、わしを小説に出して欲しいって言ったら喜んで引き受けてくれたん
じゃ」
「普通、遠慮するだろ…」
「いやー、ついわしも嬉しくなってしまってのー。断らなかったんじゃ…。」

そして気付けば９時３０分、そろそろ学校へ向かうことにした。
「でも帝丹高校なんて懐かしいよな。最後に行ったのいつだっけ？」
「９年前よ…」

帝丹高校前…

「懐かしいな…。ちっとも変わってねーぜ…」
そこへ何人かの人が新一に近付いてきた。
「よ！工藤、久しぶり！」
「あ、お前誰だっけ？」
「やだなー、もう忘れたのかよ、佐藤だよ…。顔全然変わったからわからないのもしょうがないけどよ…。に、してもお前全然変わってねーな」
「わりーかよ！！」
「新一…」
ふと声を掛けられる。
「蘭？お前蘭か？」
高校のときよりも凄く美人ですらっとしていた。
新一も見惚れる程だ。
「新一？やっぱり新一なのね。」
「でも、なんで蘭がいるんだ？たしか高校3のときクラス違っただろ？」
「やーね。聞いてないの？9年前の高3の全生徒の同窓会だって言ってたじゃない。」

あ、そういえばはがきにそんなこと書いてあったっけ。
「あ、志保ちゃんも久しぶり！」
「お久しぶりね。毛利さん…」
毛利さんとは灰原哀のときも高校の時もそうだけど現在もあまり喋ったことがない。
私って逃げてるのね…。
もう逃げる必要なんてないのに…
でも、でも…
「どうしたの？なんか元気ないよ…」
「あ、心配しないで…。大丈夫だから…」
「え？そ、そう。あ、もしかしてその子が一保ちゃん？」

「え、あ、あぁ。そうだけど…」
蘭達には子供が生まれたことは報せた。
もちろん写真ものせて。
だが、もう7年も前のことだ。
小学生の一保をみるのは初めてである。
「お父さん、この人とどういう関係なの？」
先程から、蘭や新一とお互い呼び捨てで呼んでいたので気になった一保は質問する。
「ぷっ！（くすっ）」
蘭、新一は吹き出しそうな笑いを堪える。
「俺とこいつはただの幼馴染み…。何も関係なんてねーよ。」
「そうよ。私と新一はただの幼馴染み。で、私の初恋の人ってところかな。」
そう。
毛利さんの初恋の相手は新一君。
新一君の初恋の相手は毛利さん。
だから、私は貴方の初恋の相手ではないのね…。
「初恋の人…だったの？」
「うん。でも結局実らなかったけどね…」
「お父さんの初恋の人はお母さんだったの？」
「…だよ…」
「え？」
新一は小さな声で言ったのでだれも聞こえなかった。
「…蘭だよ…。でも、途中で志保を好きになってたけどな…。」
「あら、途中で悪かったわね。私の初恋は江戸川君…だったわ…」
「何でここでコナンのことがでてくるんだよ！！」
江戸川君って誰？
お母さんの初恋の人っていってたけど…。
ここに来てる人の中にいるのかな？
「いいじゃない。私は江戸川君だったときから好きだったんだから

…」
「あのなー。」
しばらく経つとマイク音が聞こえ始めた。
「あーあー。只今マイクのテスト中。皆さん聞こえますか？本日はお忙しい中お集まり
頂き誠にありがとうございます。９年ぶりの再開を祝って乾杯をいたします。皆さん紙
コップをお持ちください。」
丁度人数分の紙コップが自分の目の前に置かれている。
それに飲み物をつぎ手に取る。
「では、９年ぶりの再開を祝ってかんぱーい」
司会者の言葉の後に全員が続いて「かんぱい」を言う。

「ねぇねぇ、蘭お姉さん。」
突然蘭が一保に呼ばれる。
もう、お姉さんと言うよりおばさんと言われてもおかしくない年齢。
なのに、突然小学１年生の子供に「蘭お姉さん」と呼ばれて少し驚く。
「え？私？お姉さんなんて…。もうおばさんよ…」
「何言ってんのよ。どっからどう見ても若いお姉さんって感じじゃない。それにくらべ
て私なんかどこ言ってもおばさん呼ばわりされるのよ…。」
突然、聞き覚えのある口調と声で割り込んできた女性。
「そ、園子！園子も来てたんだ。」
「あったりまえよ。あ、もしかしてこの子が新一君の子供？可愛いじゃない。名前なん
て言うんだっけ？」
「一保。小学１年だよ…。あ、一保、こいつは鈴木園子。」

「あ、そういえばさっき私に用があったんでしょ。」
「う、うん。お父さんってどんな人…だったのかな…なんて…。」
新一の顔を目でちらちらと見ながら皆に聞く。
「新一のこと？うーん、大バカ推理之助で好奇心旺盛でサッカーが得意だったかな。でも、新一ったら上手くすれば国立に行けたのに「サッカーは探偵のためだ」とか何とか言っちゃって…」
「そうそう。新一君、音楽以外は全部できて学年トップの成績だったもんね。よくもまぁ、あんなに欠席して留学になんなかったことが驚きだわ…」
留学？
そんなに欠席してたのかな？
それに音楽苦手なんて初めて聞いた。
「そうね。好奇心旺盛で無邪気で子供っぽくて何でも事件に首突っ込んで…、そんな感じだったわ…」
するとマイク音が聞こえてきた。
『えー、これより予定を変更してカラオケ大会を行いたいとおもいます。順番はクジで決めるので呼ばれた方はこの朝礼台の上で歌って下さい』
げー。まじかよ…。
予定なんか変えるなよな…。
しかも、よりによってカラオケかよ…。
そして1番手の名前が呼ばれる。
『1番手は…、えー、毛利蘭さんです。』
自分の名前が言われず、一安心する。
「蘭、思いっきり歌っちゃいなよ」
朝礼台に上りマイクを手に持つ。

そして曲が流れ始めた。
「♪どんなー言葉に変えて　君にー伝えられるだろう　あれからーいくつものー季節ーが
…」
次の番の人のクジが引かれ名前を呼ばれる。
『えー、工藤志保さん、お願いします。』
志保は台に上りマイクを持つと曲が流れ始めた。
「♪願いごーとひーとつだけ　叶えーてくれるなーら　傷つけあーた愛が始まらないよう
に…」
そう。
私はこの歌と同じ。
願い事一つだけ叶えてくれるなら…。
私は貴方と結婚して子供と幸せな家庭を築く。
これはもう叶った。
だけどもう1つ…もう1つ…
気付けば歌の順番は最後の人物のみとなった。
最後は一体誰の歌う歌で終わるのだろう。
そして司会者が名前を呼ぶ。
『最後に歌ってもらうのは…工藤新一君です。』
げーー！
嘘だろ。
何で最後が俺何だよ…。
嫌々と台に上がりマイクを持つ。
そして曲が流れ始める。
タイトルは「胸がドキドキ」だ。
「♪…ぶりの…つ…れて…僕は…た…」
小声で新一以外の人物は何も聞こえない。
『工藤君、大きい声で歌って…。聞こえないよ…』
当たり前だろ。

俺は聞かれたくないから小声で歌ったんだよ。
はぁ。
だから音楽は大嫌いだ。
再びメロディが流れ歌う。
「♪百年ぶりーのー世ー紀まつー泣けと言われーて僕ーは笑ったー…」
新一の歌で全員が耳を塞ぐ。
「お、お父さんってこ、こんなに音痴だったの…？！」
「音痴で悪かったな。」

同窓会は無事に終了し元クラスメイト達は次々と家に帰っていく。
そして突然蘭が言った。
「そういえば、コナン君どうしてるかな？もう１０年も会ってないんだよね…」
「げ、元気だぜ。俺の母さんがそう言ってたから…。」
「あ、そういえばコナン君と新一って親戚同士なんだっけ。よかった、元気にやってるんだ。」
「そ、そうそう…」
コナン君？
お父さんの親戚にそんな人いたっけ？
遠い親戚なのかな。

あらあら。
ずいぶんと嘘が上手いわね。
それにもう組織は１０年も前に潰れたのよ。
なぜ、まだ隠し続けるの？
毛利さんに本当のことを言って泣かせたくないから？
でも、このまま言わない方がいいのかもね。
誰にも…、ずっと…

つづく

同窓会編（後書き）

■あとがき■

かなり長くなりましたがなんか志保の登場数が少ないような…。
あ、でも次はいっぱい登場させます。
優作が言った「太陽のようなお方」は「月と太陽と…」ので出てきた言葉です。

デート編

今日、一保は元気よく家を出て行った。
丁度、昨日から夏休みで友達の家に泊りに行ったのだ。
子供が家に居ない日なんて子供が出来てから1度もなかった。
だから、新一と志保が2人きりになるのは久しぶりである。

「ふぁ～。おはよ～。」
大きなあくびをしながら新一が下に降りてきた。
「随分とお寝坊さんね…。」
「しゃーねーだろ。昨日夜遅くまで推理小説読んでたんだから。そういや一保は？まだ寝てるのか？」
「貴方がスヤスヤと寝ている間にとっくに出掛けたわよ…」
時計を見るともう午前9時だった。

「そういや、昨日言ってたな、友達の家に泊りに行くとかなんとか…。事件の依頼がなければ今日はのんびり出来そうだな。推理小説でも読むとするか。」
ソファーから立ち上がり書斎に行く。

数分後、小説の本を持った新一がソファーに座り、読み始める。
志保はその新一の姿をただ見つめてるだけだ。

「ん？お前も読みたいのか？」

「いいえ。ただ、貴方が満足そうに読んでいるからそんなに面白いのかしらって思っただけよ…」
「面白いのなんのって、なんなら読んでみるか？」

「遠慮しておくは。貴方のこの推理オタクがうつっちゃうかもしれないわ…」

３０分後、新一が読み始めたときからずっと志保はその姿を見つめている。
「何だよ。さっきから…。用でもあんのか？」
「気にしないで頂戴。何でもないから…」
「気にしないでってあのな…。こう何度も見られたら気になるに決まってるだろ？」
「……」
「もしかして…」

え？

「俺とどこか行きたいとか？」
「な、何よ。別にどこか行きたいなんて思ってないわよ…。」
「んーだよ。素直じゃねーな。デートしたいならデートしたいって素直に言えばいいだろ。」
「べ、別に私は…」
新一は志保の手を引きトロピカルランドへ向かう。

～トロピカルランド～
２人が最初に乗ったのは、ミステリーコースターだ。
「「キャーーー」」

女性達の悲鳴が響く。
一方志保の方は悲鳴もあげず、普通にしている。
その時、志保が新一の手を握った。
「え？」
あいつも結構可愛いとこあんじゃん。

2人とも次々と乗り物に乗る。
そして最後に乗ったのは観覧車だ。
相変わらず志保は普通にしている。
「なぁ志保？」
「何よ…」
「お前、素直じゃねーよな。前よりはちょっとは素直になったけどよ。恐いなら恐いとか、
俺とデートしたいとか言えばいいだろ。それにもうちょっと笑えよな」
「あら、悪かったわね。素直で笑顔じゃなくて…」
「別に悪くはねーけどさ。素直のお前と笑顔の方が可愛いぜ」
「お世辞なんていらないわ…」
「お世辞じゃねーぜ。」
”ピュ～バーン…”
と、突然花火音が耳に入る。
「丁度、花火の時間だ。」
花火はどんどん打ち上げられる。
”バーンバーン…”
志保もその花火に見惚れる。
そして笑顔になる。
「綺麗…」
「やっぱお前は素直で笑顔の方が絶対いいぜ。」
「余計なお世話よ…」

家に帰ると今日は一保が居ないので静けさが広がる。
「一保が居ないと嵐が去ったみたいに静かだよな…」

今日の花火はいつもより一段と綺麗だった。
こんな花火をみたのは生まれて初めて。
まるで空に咲く一輪の花のように…。

貴方と出会って本当に良かった。
貴方と結婚して本当に良かった。
貴方がいるから私も居る。
ずっとこうしていつまでも…

つづく

デート編（後書き）

■あとがき

新一と志保の久しぶりのデートという感じで書いてみました。
最初はスケートリンクでの花火にしようと思ったんですけど、やっぱ観覧車からの眺め
の方がいいと思って観覧車にしました。

病院編

私は丁度帰る途中だった。
帰る途中と言っても今は8時。
今日は有名な科学者の学会で志保もそれに参加していた。
最近、疲れていておまけに全然寝ていなく言わば睡眠不足だ。
いつもの道を通り自分の家である工藤邸に向かう。
その時、突然めまいが志保に襲いかかる。
そしてそのまま倒れてしまった。

気が付くと私は病院にいた。
何でこんなところに…
そういえば、帰る途中で倒れたんだわ…
志保は目をそっと開く。
「志保！目、覚めたのか？」
「し、新一…君…。どうしてこんなところに…」
「それはこっちが聞きたいぜ。お前が倒れたって病院から連絡あって事件を
　ほったらかして急いで来たんだよ…」
「あら？ごめんなさい。もう私は大丈夫だから事件の方早く行って来なさい。」

窓からは太陽が射す。
時計と見ると朝8時だった。
閉まっていたカーテンを開けるため立ち上がるが立ちくらみが酷くカーテンを開けられない。

再びベットに座り込んでしまった。
「事件よりお前の方が心配だ。それに事件はきっと誰かが解決してくれるさ…」
「無理しなくていいのよ。貴方の体には推理の血が騒いでいるんでしょ？」
「無理してんのはお前の方だろ。最近事件続きで俺居ないとき多かったし…。ずっと俺
が帰ってくるの待ってたんだろ？」
”ガラガラ”
出入口のドアが開き、看護婦が入ってくる。
簡単な検査をするらしく志保は検査室に行った。

それから1時間。
検査を終えた志保がやっと戻ってきた。
「どうだったんだ？」
「カゼらしいわ…。」
「そっか。よかったな。重傷じゃなくて…」
新一は看護婦に呼ばれ医者と会話する。
「奥さんはカゼと貧血です。」
「カゼと貧血…」
「奥さんは大夫疲れが溜まっていたらしく寝不足気味です。それに検査の結果から食事
もあまりとってないらしいですので大夫栄養が不足し、5日くらいの入院が必要でしょう。」
寝不足はだいたいわかるが、なぜ食事をあまりとってなかったのか？

どこか具合でも悪い？
それとも食欲がない？

次の日、新一は一保を連れ米花総合病院にやってきた。
「お母さん大丈夫？」
「えぇ、なんとか…」
「お母さんが倒れたってお父さんから聞いてビックリしたよ…」
「心配させてごめんなさいね…」
一保は買ってきた花を花瓶に生ける。
そして1枚の手紙を渡す。
その手紙には、

【お母さんへ】
早くよくなってください。

そう書かれていた。
たった一行しか書かれていない手紙。
だけどとても嬉しかった。
子供からの初めての手紙。
「ありがとう…。心配しないですぐに退院して家に帰るから…」

「うん。絶対だよ！それと…」
そう言ってポシェットから取り出したものは鶴だった。
「これね、今日先生に教えてもらって作ったの。だからこれお母さんにあげる」
あまり、上手いとは言えない鶴。
だが、初めて作ったにしては上出来である。
「そういえば、今日は全然携帯がならないわね…」
そう、いつもなら1日か2日に1回、必ず電話が鳴るのだ。
そう。事件の電話が…。
「あたりめーだろ。ここは病院だぜ。携帯の電源はＯＦＦって決まってるだろ。」
「あら、貴方ならマナーモードとかにしそうだけど…」
「お前が入院している間は事件の電話を入れないように警部に言っておいたんだ。
たぶんあと4日くらいはかかってこないぜ」
「この推理フェチさんが4日も推理なしで持つかしら？」

「志保くーん」
突然、病室に入って来たのは博士だった。
「志保君、大丈夫か？」
「博士、私の心配するより他人のことを考えなさい…」
辺りを見渡してみると他の病人がジロリと博士を見る。
「あ、すまんすまん…。ところで容体の方はどうなんじゃ？」
「あと、4日後には退院できるそうよ…」

そして再び誰かが来た。

「志保お姉さん大丈夫？」
来たのは歩美だ。
どうやらこのことは博士から聞いたらしい。
「えぇ、心配しないで…」
「あれ？歩美ちゃん、部活は？」
新一が不思議に思ったのも無理はない。
今の時間、部活でいないはずの歩美が今ここにいるのだから。
「志保お姉さんが心配で抜けてきちゃった。でも、よかった。志保お姉さん元気そうで…」
歩美は持ってきた花束を水の入った花瓶に入れそれを置く。
「じゃあ、私そろそろ戻んないと怒られちゃうから…。」
「バイバイ、歩美お姉ちゃん。」
「うん。バイバイ一保ちゃん」

志保が居ないので今日からは新一と一保の2人だ。
もちろん夕食も…
「お父さん、お腹すいた…」
「そうだな。何処か食べにいくか？」
「ううん。私お父さんの料理が食べてみたい！！」
「はぁ？何で俺の料理なんだよ？」
「だって、食べたことないもん」
「だからってあのなー。」
仕方なく新一は料理を作る。
人参、じゃが芋の皮を剥き、切って行く。
そして、肉やマッシュルーム、ほうれん草なども…。
一保も何が出来るのか席について楽しみに待っている。
それから数十分後、テーブルに2人分の夕食が運ばれる。
「わぁ。シチューだぁ！おいしそう。いっただきまーす！」
”パクッ”

「おいしー！お父さんってこんなにお料理上手だったなんて知らなかった。」
「伊達に中学と高校の時の一人暮らしを馬鹿にするなよな。」
「一人暮らし？だからこんなにお料理が上手なの？」
「自分の飯は自分でちゃんと作ってたからな。」
中学、高校時代新一は一人暮らしだったため自分のご飯は自分で作っていた。
時々両親から連絡はあったが殆ど有希子の一方的電話だった。
「お父さんとお母さん、居なかったの？」
「あぁ。外国に行ってたからな…。」
「外国？そこに私のお爺ちゃんとお婆ちゃんが住んでるの？」
「住んでるぜ。ロスにな。」
「会って…みたいな…」
「会ってみたいってな、ＴＶでちょくちょく見てるだろ？」
「ＴＶ？私見たことない…」
「あれ？言ってなかったか？俺の親父は推理小説家の工藤優作だって…。」
「えー！聞いてないよ。じゃあ、よくＴＶに出てくるあの有名な世界的推理小説家の？」
「そうだけど…。」

翌日、再び志保の病院を訪れる。
今日は休日なので一保も昼間から一緒に行く。
「よ！」
「あら？今日も来たのね…」
「来たのねって、まるで来てほしくないみたいな言い方じゃねーか」
「別に私は来ても来なくてもどちらでも良いわ…」
「ねぇねぇ、お母さん」
一保が喜んだ表情で志保を呼ぶ。

「昨日、お父さんがお料理作ってくれたの」
「あら、よかったじゃない…」
「それと、お爺ちゃんのお話したんだよ！お爺ちゃんは世界的推理小説家の工藤優作だ。
　とか外国に住んでるとか…。お母さんの方のお爺ちゃんとお婆ちゃんや兄弟姉妹…」

その質問で一瞬、静けさが広がる。
「おぃ！一保…」
新一は首と目で一保に合図する。
一保はがっくしとした暗い姿の志保を目にする。
「死んだわ…。私が生まれてすぐ交通事故でね…。姉は…私の姉は…」
志保の目から一粒の涙が落ちる…。
ずっと姉のことを忘れていたのだが一保の質問で思い出してしまった。
姉が死んだあと、中々立直れず大変だったのだ。
「姉は…殺された…わ…」
え？！
「私もやっぱり、あの時に…、そうすれば姉とも…」
「おぃ、やめろよ。お前のお姉さんはお前の心で生きてる。
　お前が居なくなったらお姉さんの生きる場所を奪うことになるんだぜ」
「……」
「それに、お前が居なくなったら周りの人間がみんな悲しむぜ。一保だって蘭、
　それに目暮警部達、俺の両親、歩美達や服部、博士、俺だって…」
「フ、何本気になってるのかしら？冗談に決まってるでしょ。」
「じょ、冗談…」

「それと、そこ退いてくれるかしら？これから私昼食食べに行くから…」
志保は出入口を開け病室を後にした。
「お母さんのお姉さんが殺されたって言うのも冗談なの？」
「本当だ。俺が殺したようなもんだからな。」
え？
「お姉さんはある人間に騙され殺されてしまったんだ。お姉さんとは身近な人間だった
にも関わらず助けられなかったんだからな…。最初は大変だったんだぜ、貴方が近くに
居たのに助けられなかったの？って…。でも、もうこの話はするなよ。あんなこと言っ
てるけど内心わかんねーからな…」

私の姉は殺された。
あの全身黒ずくめの組織によって…
私のたった一人の肉親だった。
それなのに…
私ったら何考えているのかしら。
姉が殺されたのは１０年も前の話だし組織はもう存在しない…。

つづく

病院編（後書き）

■あとがき

志保が入院と言う設定で書きました。

蘭も見舞いにこさせようと思ったんですがやっぱりやめました。

で、その変わりに歩美登場！です。

最終回編

あの名探偵さんは事件でいないことが多い。
ここ一週間家に戻ってきてないのだ。
出掛ける時に5日後には帰るといってたのに…。
もう帰ってくる予定日から2日も経っている。
まさか、何かあったのでは？
そう思うことも多くなった。
早く…帰って来て…、もしかして貴方の身に何かあったの？

「お父さん今日も帰ってこないのかな？」
「そうね…」
「連絡くらいしてくれてもいいのにね…」
「そうね…」

もう今日も帰ってこない。
私はそう思っていた。
そして予定日が過ぎて3日目の朝を迎えた。
やはり昨日も帰って来なかったらしい…

夕方になり雨が降りだしてきた。

”ガチャっ”

志保は勢い良くドアを開け外へ出た。
雨の中カサもささずに…。
走る私の瞳からは涙が出ていた。
この雨のような涙が…。
志保は近くの公園によりベンチに座った。
よく昔、学校帰りにここに座って2人で話したわね…。
楽しい思い出が志保の頭を横切る。
そしてあそこはよく少年探偵団の子供達とよく遊んだわ…。
思い出すたびに志保の涙は増える一方だ。
涙が止まる気配もない。
それに伴い雨も酷くなる。

”タッタッタ…”

再び私は走りだした。
私の瞳からは大粒の涙が横切って行く。
バカバカ…
早く帰って来て…
お願い…
早く貴方に会いたい…
突然私は誰かに腕を捕まれた。
え？何？
私は振り向く。
え？…
なんとそれは紛れもなく新一だった。

「こんなとこで何やってんだよ。しかもびしょぬれじゃねーか。」
志保は新一に抱きつく。
「おい、どうしたんだよ？何かあったのか？」
やっと、帰ってきてきてくれたのね…

貴方をずっと待ってたのよ…

新一は自分のカサに志保を入れ家に帰る。
「やっぱうちが一番落ち着くよな」
ふいに志保は立ち上がる。
「…私なんかもういらない存在なのね…。さようなら…」
「何だよ、一体どうしたんだ？今日の志保なんか変だぞ？」
「そうね変かも知れないわ…」

新一は立ち上がりキッチンに向かう。
そして飲み物を持ってきた。
「取りあえずこれ飲んで落ち着けよ…」
”コクリ…”
志保は一口飲む…
「これは…」
「旨いだろ？これ産地直送の材料を使ったココア何だぜ」
「えぇ、おいしいわ…」
「あ！お父さん帰って来たんだ…。あー！ずるい一保も飲みたいー！」
「しゃーねーな…」
再びキッチンに行きココアを持ってくる。
「ほら、熱いから気をつけろよ…」
一保が一口飲む。
「わぁ。このココアとってもおいしいよ」
「そうだろ。なんたって産地直送だからな…」
ふと、志保は思い出す。

あの時の思い出を…
「前にもこんなことがあったわね…。私が飛んだ勘違いしてて落ち着かせる為に私に
ココア飲ませたわね。」
「そーいや、そんなことあったような…」
「その時は、”新発売”だったわね…」
「そうだったな…」
「何なに？」とそんな感じで一保も話に交ざる。
「前にもこんなことがあったって何？」
「私が高校生の時にあの人が蘭さんに告白されたのよ…。でも振ったらしいわ…」
「あんときはびっくりしたぜ…。突然「貴方には毛利さんがいるでしょ」とか言ってくるんだもんな…。まぁ、あの時飲んだココアのおかげで俺達が両思いってことがわかったけどな…」
「思い出のココアってところかしら…」
「ふーん…。」
あの時、あのことがなければもしかしたら私達は結婚してなかったかも知れない。
全部、このココアのおかげね…。
そしてまたこのココアに助けられた。
このココアには感謝しないといけないわね…。
また、恐らくこのココアに助けてもらうことがあるかもしれないわ…。
その時はよろしく…。
幸せなホットココアさん…。

最終回編（後書き）

■あとがき
はいはーい。
今回が一応最終回です。
最後ら辺を最終回っぽくこの小説のタイトルである幸せなホットココアと言う言葉を入れてみました。
ここまで読んでくれて本当にありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0015a/

幸せなホットココア

2010年10月10日12時56分発行